

外堀公園について

高橋, 佳子

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

49

(開始ページ / Start Page)

116

(終了ページ / End Page)

116

(発行年 / Year)

1994-03-15

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019746>

先輩方へのメッセージ

日暮行男

さてどうやって書こうか、迷っている。僕は何人かの四年生との付き合いはあるが、さて僕は卒業される諸先輩方に、どの様に答辞を述べれば良いのだろうか。僕はお喋りどころか、文を認めることはほとんど苦手である。では、身近な所から記していく事にする。僕が今の四年生の方々と親しくなり始めたのは、確か二年生の頃である。その頃僕は大学の勝手も漸く掴め始め、少しずつ行動範囲を広めていたが、あの頃は先輩方と行動したり会ったりする機会があったので、先輩方には顔が知られていたかもしれない。また僕も先輩方の顔をよく覚えている。今回執筆される予定のKさんも、僕の方がひよんな事で顔を覚えていたので、いろいろと話を聞いて

外堀公園について

高橋佳子

私は日頃から外堀公園を法政大学のもうひとつの庭のように感じてきた。靖国神社の高い木立に囲まれた、とても都心とは思えないひんやりとした雰囲気のある中庭も捨てがたいが、何といっても外堀公園が好ましい。私の入学した頃は正門の辺りは高いフェンスに囲まれていて、学園紛争時代の面影を色濃く残していたし、一種の聖域というか、学問の障りとなる何者をも拒絶する、精神的な壁のようにも思っていた。しかし逆に公園は、堅苦しい所から下界へ逃れるための、懸け橋のように感じたこともある。入学式の四月三日に、最初に祝福してくれたのは、その年早めに咲いて、ちょうど散りはじめた武道館の桜だったけれど、不慣れな私たちをそこを通るたびに出迎えてくれたのは桜のトンネルだった。妙に心が弾んだものだ。顔見知り

になった人たちと、親交を深めながら、情報交換をしながら、きまって公園の方を歩いた。夏目漱石の小説のなかに、外堀の桜の描写があるのを誇らしく思い、また趣き深く思い、飽くまでベンチで読み耽っていたこともある。「大学での思い出」を引き出す鍵は、外堀公園にたくさん落ちている。徹夜で仕上げたレポートを提出するために、残暑厳しい中を汗をかきながら急いだのも、堀の水面を自在に動く光に感動してモネの睡蓮の絵を思い浮かべたのも、旅行の土産話をしながら歩いたのも、人種差別や、女性問題で、意見を闘わせながら歩いたのも、ここだった。私は割合歩きながら話したり、考え事をするのが好きなので、自然と駅から大学への道の中で大きなウェイトを占めるのは外堀公園での思い出なのかもしれない。陳腐といわれるかもしれないが、昼食を食べながら、友人と語り合った将来の夢や誓いは決して忘れないだろうし、それらの語らいが現在の私を作ってきたともいえる。大学が知識を養う家だとしたら、外堀公園は、私の人格を養うのに一役かった庭というところだろうか。

(西野ゼミ 一部 四年)